

事業活動実績報告書

施 設 名	熊野幼稚園
教 育 理 念	心身ともに健康で基礎体力のある子の育成

1 事業名	生きる力を育成するための馬介在教育
2 実施期間	令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		5歳児が毎日高齢馬の餌づくりに関わる中で、馬をよく観察する力が育ち、多くの発見や疑問が生まれた。 (例: 歯が大きく茶色いのはなぜか、歯磨きはしないのか、体の中はどうなっているのか、触れると皮膚が動くのはなぜか など) また、決められた分量を量ることができるようになった。	 
		(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		自分より大きな動物が後ろからついてきても緊張せず、馬の気持ちを考えながら責任をもって散歩させることができるようになった。	 

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 遊び場のそばに馬がいることで、遊びの合間に自然と関わることもできた。その中で、馬のぬくもりや安らぎに触れ、触覚の発達につながった。 また、馬にも嬉しい・怒る・眠い・お腹が空くなどの感情があり、様々な形で表していることに気づいた。馬と気持ちが通い合う喜びを感じ、お友だちとの関わりにも心の育ちが見られるようになった。  
		(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 馬と関わる中で「体の中はどうなっているのだろう」と疑問をもち、実際に絵に描いて表現した。 また、「しっぽは硬いのか」という疑問も、実際に触れて確かめることができた。  

効果検証報告書（継続事業用）

施 設 名	熊野幼稚園				
教 育 理 念	心身ともに健康で基礎体力のある子の育成				

事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
	健康	人間関係 ◎	環境 ◎	言葉 ○	表現

1 事業名	生きる力を育成するための馬介在教育				
2 事業概要	馬介在教育を通して、体験的な活動を行うほか、豊かな心を育む				
3 対象学級(クラス名) 対象人数				全園児	200 名

計 画 時	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 調教が施されているポニー3頭・馬飼育管理者・馬調教者・馬曳き手 安全に活動できるスペース ハンドラーは、園内に2名 園児の興味関心を引き出し、促すことができる教職員 昨年度に引き続き、馬とのかかわり方などのノウハウを教員全体に普及する
	事業後 4についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 馬の管理・調教には専門性が必要である。 専門性と幼児理解を備えた人材が関わることで、教員との連携が深まり、活動の充実に つながった。

計 画 時	5 事業のねらい	馬を幼児の間に介在させながら人と人との関係をよくしたり触ることによる安らぎを感じたり させる。最終的には、心や身体の広い意味での健康を目指した活動とする。無関心な子 が関心をもてる様に配慮する。
	事業後 5についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 馬といつでも関われる環境に加え、教員が子どもの気持ちに寄り添い関わる機会を設け たことで、心の成長が見られ、不安や寂しさなどの感情を自然に表現できるようになった。 さらに、こだわりの強かった子も、柔軟に受け入れられる場面が多く見られるようになっ た。

計 画 時	6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ●戸外遊びで触れ合えるよう、日中は園児の遊び場の一角にある丸馬場へ放牧。 ●ポニーに騎乗する。毎日1～2時間程度、乗りたいと思った子が騎乗できるようにしてい る。 新学期、新入園児には積極的に誘うが無理やり乗せることはしない。 注)使うポニーは、 人間生活との共生関係が確立されている。複数の馬を同時に使用する場合は、馬同士の 相性にも留意する。 ●ポニーの散歩をする。毎日、散歩をしたいと思った子ができるようにしている ●ポニーの世話をする。4歳児が中心となり、グループごとに交代で毎日ウンチの掃除、 ブラッシングを行う。5歳児は、高齢馬への餌の準備・餌づくり。
		上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点
		●馬とのかかわりを通して、友だちとの関わりを深めたり相手の気持ちに気付けるように していく。
		(継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 ●馬と関わる際、色々な部位に興味を持てるような声掛けをする。 ●馬を観察することで、馬の感情や体のつくり等に気付けるようにする。 ●馬体への興味が人体にも広がり、人体の構造にも注目できるようにする。

計画時	事業後	6についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 新年度の不安が強い時期は、騎乗や世話を中心に関わる姿が多く見られたが、次第に遊びの中で友だちと一緒に関わる姿へと変化した。 また、5歳児は毎日の餌づくりを通して、騎乗や世話にとどまらず、観察や描画、体の構造への関心へと活動が広がった。 さらに、日々関わることで興味が引き出され、観察や想像する力の育ちにつながった。
	7 環境構成例		●園児の馬への興味の度合いは様々である。長期的にはどの子にも効果が出るように工夫。子どもが馬についての知識を増やせるようにする。 ●馬を介在させた教育活動を行うには、馬自身が健康であることが前提。 ●教員は、子どもの状況を理解し、子どもと馬のかかわりの架け橋となるように努める。 ●食べていい草の種類や形状、食べさせてはいけない草の種類や形状については管理を行うとともに、子どもがわかるようにしていく。 ●毎日何回も乗る子もいれば、遠くから見ていただけの子もいる。遠くから見ていない子に対しては、離れた場所での馬とのかかわりを認める声掛けを忘れずにする。 ●よほどの理由がない限り、卒園までには一度はまたがるように促す。乗るのが怖い子や苦手な子は、無理に乗せることはしないが無関心にならないように配慮する。
計画時	事業後	7についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 教員自身が馬と関わる体験を重ねることは、知識以上に重要であり、子どもの気持ちに寄り添った声かけにつながっていた。 また、馬の体調や機嫌を日々共有することで、安全に配慮した関わりが継続できた。 さらに、教員の関わりを通して、園児にとって馬は仲間として身近な存在になっていった。
	8 期待される効果 児童の姿		取組を通じて期待される児童の姿や効果等 馬のもつぬくもりや安らぎが好作用することで、触覚が発達。 騎乗することで高さや温もりを感じ、振動やリズムに脳が刺激される。 ポニーにも色々な感情(嬉しい・おこる・眠い・お腹が空いた)があり、様々な形で表していることに気がつく。気持ちが通い合う喜びが生まれ、お友だちとの関わりでも心の育ちがみられる。 自尊心が高められる。 散歩の途中で気持ちが他に移り紐を持つ手を離すと馬が勝手にどこかへ行ってしまうため、最後まで責任をもって行えるようになる。 自分より大きな動物が自分の後ろからついてくる(もしくは、自分の横を歩く)ことは、緊張したり気分が高揚したり胸が高鳴ったりと子どもにより様々な感じ方をする。教員は、その気持ちに寄り添い、共感する。
	事業後	8についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 友だちとの関わりにおいて、お互いが心地よく過ごす姿が見られるようになった。 また、同学年だけでなく他学年との関わりも広がり、助け合う姿が増えた。 さらに、他の生き物への関わり方にも変化が見られ、一方的ではない関わりや命の大切さを感じる姿が見られるようになった。
9 効果検証総括			事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて すべての子どもに対して、馬との教育的な関わりによる効果が見られた。 関わりを通して情緒面の変化が生まれ、良好な友だち関係の構築につながっている。 また、言語表出や言語的なやり取りにも良い影響が見られた。 さらに、日常的な関わりの中で、自分の気持ちを表現・言語化する力や、観察する力、探求する力が育まれている。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。